

1999日本留学フェア（中国）に参加して

農学部 佐藤宗治

毎日毎日鹿児島大学の入学式を2度実施、これが今回の留学フェアの規模である。参加人員約1万1千名（添付「資料」参照）の一大イベントであった。しかも、上海では開催期間が週日であったにも拘わらずである。もっとも、我らが鹿児島大学のブースへはこれらの一部、約5%の訪ずれではあった。しかし、それでも、若松辰也学生課専門職員と通訳そして私の3人でこなす必要があり、その上、会場に監禁された状態であったので結構疲れを感じた。ちなみに、日本語では留学生フェアとカタカナであったが、中国語では実直に「99日本留学説明会」であった。

11月11日と1のぞろ目が続く日の夜、おニューの巨大な北京空港から、一路北京5州大酒店へと向かう。気温は10℃前後と、北京も異常気象の例に漏れず暖冬で、厚着を準備してきて損をした気分だ。大酒店と言うから大型の激安酒屋、酒樽にでも泊まるのか—幸せ！と思いきや、アジア大会プレスセンターのあったホテルだ。部屋のテレビにはCNN、もちろん日本語のNHKも入り鹿児島のホテルが何となく貧弱な気がしてしまう。窓の外を見ると、巨大な競技場が見える。しかし、広い北京の端っこで、おまけに、交通マナーは日本人の想像を絶し、道を渡るのも命がけの国のこと、一人で外に出る気もしない。第一、面白そうな物が近くに無い。こんな広い所で道に迷ったり、事故にあったらどうしようかという心配が先に立つ。しかも、少林拳を初めとするカンフーの国の筈なのに、韓国のテッコンドーの旗があちこちにひらめいているときている。結局、夜の行動も、北京ダックコースだの何だの、観光会社御用達コースに登録してしまった。

上海は、ごちゃごちゃ何が何か分からないまま拡大してきた巨大都市で、これまた小生の手には負えたものではない。交通の便も良く店も多いが、ガイドブックも持たずに来たので、何せ店を知らない。ここでも夜は団体観光コースに便乗してしまい、せっかく上海カニのシーズンに来ているのに、今日の日本人男性そっくりの貧弱な雄でごまかされ、情けない気がした。これでは、疲れが取れない。ただ、参加者のほとんどがそうなので、皆んなで騙されれば怖くないの気分でもあった。

もちろん、学問的？な収穫もあった。上海にある屋敷の塀の上に龍がある場合には、尻尾が日本を向いている。これが日本で地震が頻発する理由だそうだ。風水学的にそうなのだそうだ。従って、上海では地震が起きないことに自信を持っているのか、高層ビルが砂州に近いような場所にも林立している。しかし、易で安全と言われても、個人的にはここには長居はしたくない。同じ中国なら雲南省辺りかモンゴルは住みたいが・・・。

さて、フェアの方かというと、冒頭に述べたような盛況ぶり、「中国では英語熱に次いで日本語熱が高い！」という噂は本当であった。じゃー、これだけ日本熱が高いということは結構な事と喜べるか？との疑問が出てくる。残念ながら、実際に中国に詳しい人々に共通する意見は、有能な生徒は英語を勉強しアメリカに行く。日本へは、場合によってはそれなりの評価のある自国の大学にも行けないが、金は少しあるといった層が日本をねらっているということだ。昔と違い、国も開かれ、一人っ子政策の結果、中国の教育熱は過熱気味で、海外留学は特別な事ではないという前提が、これからの留学生政策に必要なかもしれない。

鹿児島大学には大学院への留学生が多いが、アメリカの大学院の場合であれば、先ず、卒業証書印刷所と呼ばれるいい加減な学校は別として、まともな私立や州立大学では本国での学部成績が4段階評価で3.0以上が最低限で、さらにTOEFLのスコア、また、特に博士課程であればGREのスコアも要求される。決して入りやすくは無い。また、入学後も、一定水準以上の単位と成績をとり続けたいけない。それに対して、日本の大学の大学院に応募して落ちた留学生はいったい何パーセントいるだろうか。

留学生に甘い国として、そしてうまくいけばアルバイトも可能な国としての留学先であり、断じて日本国に対する敬意を伴った、戦前には一部には明らかにあった、規範にする国としての留学先との意識があるとは言えまい。残念なことである。

鹿児島大学は大学の規模から逆算して、500人の留学生を受け入れても良いとの考えがある。過去の例からは、今回のフェアへの参加の結果として鹿児島大学に応募してくる人は、あまり期待できないかも知れないが、日本留学熱がある限り、中国から積極的に受け入れる気になれば応募者を増やすことはそんなに難しくはない気もする。留学を考えている中国人は、Eメールアドレスをかなりの割合で有している。インターネットの活用を視野に入れば、数の増加そのものは可能だとの感触を持った。

むしろ、そのような状態で問われるのは、大学の理念ではなかろうか。生活環境の準備はあるのか。数の増加以外に留学生に対する方針、展望、姿勢は？となると、ただ、日本人学生にも刺激になるからとか、帰ってから友好に役に立つだろう以外、留学生受け入れの理念はあまり議論されない。

以前より、民間では鹿児島県はカラモジア交流等で東南アジアからは農家へ受け入れてきた。しかし、彼等の多くは、本当に自国にプラスになる働きをしたらどうか。自分の家系のみで技術や日本との繋がりを独占し、むしろ格差を広げただけではないかとの疑問が出てくる場合もあったようだ。当初、受け入れの日本側が期待した、開発途上国の底辺を上げることには必ずしも貢献していないのではとの声は、一部ではあるが、今も聞く。

平成12年2月9日付けの日本経済新聞に「日本留学 夢追う中国人」と題して、中国人留学生のドキュメント作成の記事がある。作者自身が元留学生で、日本の大学を卒業後日本の会社に勤め、今は、CS放送チャンネルの社長である。こういった仕事は大切に、ビデオは中国でも評判で、日本でも何れ放送されるであろう。しかし、彼女でなければこのビデオは本当に出来なかったのか。そして、彼女は卒業後、何故中国に帰らなかったのか。日本の大学で学んだ事はいったい何だった等々を考えると、少し複雑な気持ちになる。

単に甘く受け入れればそれで良いのが国際交流とは思えないが、実際には、下手な日本語をしゃべっても、「日本語がお上手ですね」、下手糞に花を生けても、日本人なら何年も修行しないと得られない免許を与える。これではそれだけの国としての評価しか無くて当然かもしれない。確固たる主義を持つことが、国際舞台では必要だと思う。

政治屋はアメリカの傀儡、そして、政府が指名する似非有識者達は日本も公用語に英語を加えるべきだとのたまわる。いや、もっと身近に、大学院への入学の際、日本語は多くの場合必須では無い。(語源や文化に共通点が多い欧州の大学の一部が英語を認める場合があるのとは次元が違う。)しかし、博士号の英訳をDr.でなくPh.D.として学位を出している。自分が学んだ国の言葉すら十分理解しようとしめない人が、本当に尊敬に値する文化人なのか。自分が学んだ所の文化も哲学も理解しないで、Ph.D.があり得るとは私には到底思えない。通常、それなりの評価のある欧米の大学では、Ph.D.を出す場合には、形式的ではあっても人物の評価を多角的に行うという意味で、大学が独自に選出した全く別分野の副査が審査に加わる。日本では、その国の文化すら否定する人であっても、専門馬鹿であっても、とにかく知識に対して博士号を出す場合があるようだが、実際には、こういった行為こそが、単に個人の手段として便宜の良い国として国際的には映っていると思われる。

ま、ここでは、こういった議論はせずに、素直に報告する。

先ず、今回のフェアというか説明会で気が付いたこと。

質問は、ほぼ同じ。従って、上海では予めFAQを通訳に示しておいたので、楽だった。ただ、奨学金の話や国立と私立、あるいは別科等、一括して説明すれば済む事を、来る人ごとに繰り返す言うのは苛立った。もっとも、パンフレット(日本留学指南)の何頁を見なさいと言うようにした。これなら、予め、中国語でテープに録音しておいて、エンドレスで流すのも手かと思った。

もちろん、日本語能力の要求レベル、鹿児島と東京からの距離なども気にしていたようだ。「え、何で東京?上海の方が東京より近いんですよ。」と、とぼけた。

大学院レベルへの入学希望も、結局は大学では日本語科で勉強し、日本では全く違う例えばビジネスや電子工学などを希望する、いや何かを希望するならともかく、何でも分野は構わないので受

け入れてくれる先生は？と聞く学生も極めて多かった。アメリカへの留学希望者が、こんな事を受付担当者に言ったら、怒られるか即座に断られるだろう。

専門は後で何とかするので今受け入れてくれという態度は、鹿児島大学に入学希望の私費留学の統一試験のスコアを見ればほぼ明らかだと思う。鹿児島大学受験者に聞いてみると、日本語を日本語学校で1-2年勉強をして受けに来ている。日本語学校では特に高校の勉強を復習したり、基本的な専門用語を日本語で確認などはしていないようだ。外国人は受け入れられやすい、特に鹿児島大学は穴だとの情報は、福岡や関西、関東あたりの日本語学校の進学指導では普通の事かもしれないと疑っている。ひょっとしたら、こうなった背景には、過去、鹿児島大学は正式の留学生として来た学生の配偶者を、気安く本来の専攻に拘わらず、本人が希望する専攻で受け入れた事例があるからかもしれない。

もう1点、気になるのは、外国人は日本語はともかく英語はできる？これは錯覚である。今回我々のブースを訪ねて来た中国人の殆どは、英語を読むのも怪しいレベルだった。自己申告で英語ができると書いていてもアテにならない。日本語を勉強してきた人は特に英語に弱い可能性が強いと思っていて良いと思う。今までの鹿児島大学私費留学志願者の統一試験の結果をみても、鹿児島大学志願者の英語の成績は全員が良いわけではない。

数と質の問題は、これから受け入れの理念に拘わって来るので重大な問題として避けられまい。

後学の為、主催者の公式実施報告から質問の多かった事項を抜粋する。

1. オリエンテーション時の主要質問事項

(但し、各ブースを訪ねてきてから下記と同じ質問を何度も受けたので、

上述した通りオリエンテーションが不十分だとも思った。)

- *日本語学校と日本語別科との違いについて
- *大学入学に係る保証人について
- *日本語能力試験の有効期限について
- *査証が発行されない理由について
- *研究生の身分について
- *技術研修終了後の留学の可能性について
- *地方での情報提供機関について
- *大学間交流協定の締結について

2. 個別

- *奨学金制度について（文部省奨学金、渡日前奨学金等）
- *経費支弁証明に必要な金額について
- *日本での受験のためのビザ取得について

- * 私費外国人留学生統一試験について（内容、受験方法等）
- * 中等専門学校卒業者等の留学について
- * 中等教育終了までに12年に満たない場合の留学について
- * 海外から出願できる大学について
- * 留学生日本語別科について
- * 大学への留学について（指導教官の探し方、研究生について等）

個人的見解で、今後への参考を少し列挙してみる。

> もちろん、鹿児島大学を海外に売り込む！ならの話である

* 簡易パンフレットは大量に必要

大学の英文案内はアツという間に消えていった。途中から、若松さんの英断で一部抜粋のコピーに切り替え、必要に応じて冊子を渡すこととした。簡易パンフレットを予め大量に作成しておくべきだと思う。

* 説明会への来場者が来ることはまれ？ならば、宣伝！

知名度を上げるためにはプロの力を借りる必要がある。

私立大学はバリバリの元商社マンを留学生担当に雇っている。

広報活動、広告に金をかける必要がある。

掲示物、大学ポスター、大学旗は必須だと思う。

法被は国立でも複数校着ていた。

校旗はほとんどの大学が飾っていた。

私立大学はさらに配布用のボールペンしおり等！も配布していた。

* 学部名、大学名の工夫

‘法文学部’は中国においては、‘フランス文学部’に化ける！

本学法文学部経済情報学科の平成12年度私費留学生志願者が多いことでもわかるが、経済、経営、ビジネス、情報、コンピュータ、電子等の言葉は、少なくとも現時点ではアピール効果がある。

今回我々のブースに来た留学希望者に限れば、彼等の一般的な留学目的は、‘日本にとにかく行き、ビジネスチャンスを掴み大金持ちになる事’と、言えるかも知れない。

* 大学の留学生に対する方針、展望、姿勢

私立は、受け入れを拡大し、質より量を割り切って明確にしている所も多い。

* ビジネスとして斡旋会社や留学を意識した私立高校の存在

留学生を扱うことは金になる。

情報を、多数存在する斡旋機関に提供する。

但し、質の良い学生はやはりアメリカの有名大学等へ行くようだ。

* 奨学金、住宅インフラ整備

民間企業、特に地元の協力を得る努力は必須である。

寮の混住等の策を練る。

生活道具等の円滑な回転や交換の斡旋が必要だと思われる。

* 複雑な高校、専門学校、大学システムの理解

各国の教育システムのデータベース化や継続的資料収集が必要である。

中国特有の問題としては、同じ漢字の用語が違う意味となる混乱を認識する。

例えば、研究生、予備課程、統一試験等、同一用語の言語による差異を知っていないと誤解を招く。

* 即刻返答を欲しがる

学部なり学科単位で窓口の整備が必須である。

今回は、私立や小さな大学とは違うので現場では判断が伴うことは返事ができないので、後ほど当人へメールや資料郵送で対応することとした。

* 現場での情報検索は必須

今回は、研究者総覧、職員名簿（電話帳）が大活躍した。

教官なり専門と結びついた連絡先等のデータベースの構築と、それを会場現場で利用する為、長時間用の大型バッテリーとコンピュータを準備していた方が良い。

* 同じ質問が多すぎる

文部省や留学フェア主催側で国立大と私立と区別し、もう少し奨学金等共通部分のオリエンテーションを徹底するよう依頼する。

* 通訳の選択

通訳は、今回はたまたま良かったが、他大学をみると能力差があり、少なくとも日本留学経験者でないと、教育制度の違いや同じ言葉に意味が違う事など誤解を招く場合があるように思われた。

*外国人は英語が出来るという妄想を捨てる

自信を持ってしゃべる人は多いが、英語レベルは日本人でも様々なように大きな個人差がある。

欧州でも一歩ホテルを出ると、観光名所でない限り英語が通じないので、食事にも苦労した人は多い筈なのに、日本では、外国人＝英語堪能の図式が何故定着しているのか、私には正直全く理解できない。テレビ番組等で、モンゴルや南米の奥地等に行った日本人が、何かというとイエス、オーケーだのサンキューと言って、相手がキョトンとしている場面を何度も見たことがあるが、こういうことをする一部日本人の心理が小生には分からない。

留学生を迎えるには、本当に使える言語を第三者から確認をとるか、日本語も英語も通じない時のコミュニケーションの補助手段を常に考えておくことも今後は必要だと思う。

*数なのか質なのか。人材なのか人物なのか？

これは要議論だ。まず、割り切るかどうか態度をはっきりさせなければ何も進まない事だけは確かだ。

***** [資料] *****

1999年日本留学フェア（中国）

主 催：財団法人 日本国際教育教会、
中国留学服務中心

後 援：日本国文部省
在中華人民共和国日本大使館
在上海日本総領事館
中国教育部国際交流与合作司

協 力：上海教育国際交流教会

開催都市：北京・上海

開催月日：＜北京＞1999年（平成11年）11月13日（土）、14日（日）
＜上海＞1999年（平成11年）11月16日（火）、17日（水）

開催会場：＜北京＞北京国際会議中心
＜上海＞華亭賓館

来場者数：＜北京＞5,348名（前回4,771名）
＜上海＞5,526名

日本側参加：50大学 3 機関114名＋観光会社より 2 名
（国立21大学、公立大学、私立27大学、その他 3 機関）

***** [付 録] *****

復旦大学訪問雑感

中国公式ランキング第3位の総合大学で、特に文系では有名なのでかなりの方がご存じだと思う。上海最後の日にこの大学を訪問した。最近では、理系にも食指を伸ばしてきており、生命科学や電子分野でも知られるようになってきた。日本人留学生も中国語を学びに多数来ている。日本の大学とも協定を結んでいる。(詳細はURL：<http://www.fudan.edu.cn/> を参照)。この大学は、いわゆるお金を落としてくれる留学生を集める為、外国人向け中国語コースを充実する一方で、質の高い教官を集めて世界的な大学に成長してきた。

(余談だが、この大学に限らず、中国の幾つかの大学では、社会人や大学に正式に入学できなかった人々の為にも、別クラスで授業が開講されている。日本への留学書類の履歴書には、それらの課程を修了しただけで〇〇大学卒と記載される事もあり可能性が無いわけではない。受け入れの際に注意すべきかも知れない。)

驚いたのは、彼等の日本研究は日本以上かもしれないとも思えた事だ。中国に在りながら戦後の進駐軍の占領政策を決めたアメリカの日本研究センターの一翼を担っている事を伺わせる節すらあった。日本の一般雑誌、統計資料は鹿児島大学図書館より揃っているかもしれない。おまけに、その教官の日本語レベルは、日本に住んでいるわけではないのに、日本人、それも教養の高い人と同等であった。

もし、その学生が鹿児島大学に来ることになれば、果たして、我々は自信を持ってその学生を受け入れる事ができるであろうか。そして、学生交流協定を結んだ場合、送って恥ずかしくない学生が見つかるだろうか、ふと思った。

漢民族はプライドが高い。表面上はどんなにこやかでも、相手の本質を見抜いて、それが水準以下であればその人を利用はしても本心からは付き合わない。彼等の評価に耐えるには、それなりの覚悟がいる。復旦大学に限らず、世界のどの大学とも、堂々と交流できる我らが鹿児島大学にせねばなるまい。